

# アレルギー性鼻炎に 補中益気湯合桂枝加黄耆湯

平田医院 院長 平田 道彦

キーワード

- 気虚
- 星状神経節ブロック
- 水飲
- 補中益気湯
- 桂枝加黄耆湯

アレルギー性鼻炎の病態は「水飲」の証が表立っているが、本態には局所的な「気虚」が大きく関係していると思われる。そこで、桂枝湯合玉屏風散に升堤作用を付加する意味で柴胡・升麻を加味すればさらにアレルギー性鼻炎の「気虚」に応じることができるのではないかと考え、エキス剤の補中益気湯を桂枝加黄耆湯に合わせて使用したところ有用性を認めた。

## はじめに

アレルギー性鼻炎のアレルゲンの代表であるスギ花粉の飛散状況は全国ニュースになり、今やこの疾患は国民病の様相を呈している。良性疾患とはいえ、鼻汁、鼻閉、くしゃみによる苦しみは生活の質を低下させるほどで、臨床的に看過できない。

西洋医学的な治療は抗ヒスタミン剤に始まり、劇症にはステロイドの点鼻、内服、果ては鼻粘膜の焼灼術まで行われているが、副作用の問題もあり決め手となるわけではない。

星状神経節ブロックもこの疾患の治療に応用されてきた。若杉の報告<sup>1)</sup>以来、星状神経節ブロックがアレルギー性鼻炎に効果を示すことはペインクリニックの間では周知のことである。しかし、全例に効くわけではなく、その効果にも症例によって差がある。一回のブロックできれいに症状が消えるものもあれば、何回ブロックしてもあまり効果をみないものまでさまざまである。

筆者はこの効果の差は患者の体質や体力によるのではないかと考え、漢方的な虚実の差や気虚の有無とブロックの効果との間に相関があることを見出した<sup>2)</sup>。

すなわち、気虚スコアが高い症例では星状神経節ブロックの効果は低く、持続期間は短い。また、気虚スコアが低い症例ではブロックの効果は強く、持続期間も長い。つまり元気なアレルギー性鼻炎患者では星状神経節ブロックがよく効くのである。

アレルギー性鼻炎に対して星状神経節ブロックが効果を示す理由として、鼻粘膜におけるアレルギー反応と交感神経系との間の悪循環を星状神経節ブロックが断つことが挙げられている。元気な人では

その遮断効果が高く、そうでない患者ではいくら遮断しても、アレルギー反応の抑制にはつながらないということになる。さらに、星状神経節ブロックがあまり効かない気虚の患者に補気剤を投与すると、星状神経節ブロックの効果が高まることも臨床で多く経験する。

これらのことから、アレルギー性鼻炎の症状の発現には免疫応答が行われる場の「気」の量が関係していると考えられた。

さて、従来漢方治療ではアレルギー性鼻炎の症状を「水飲」と捉え、麻黄剤をベースに虚実に応じて麻黄附子細辛湯、小青竜湯、越婢加朮湯などを用いるのが常套であるが、その多くは標治にとどまっているとわざるをえない。その中において、筆者の師匠である織部和宏先生は桂枝加黄耆湯加防風・白朮を考案され、アレルギー性鼻炎の治療に用いて効果を得ておられる。これは桂枝湯合玉屏風散であり、温補しながら発表し、気を補う方意と考えられる。

確かにアレルギー性鼻炎の症状である鼻閉は、毛細血管の拡張と血漿の血管外漏出によって発生する鼻粘膜の浮腫が本態で、これは「気」の固摂能の低下と見ることができる。また、流れる落ちる鼻汁は粘膜からの漿液の漏下であり、「気」の升堤作用の低下とも考えられる。さらにアレルギー性鼻炎発現の端緒であるアレルゲンの侵入は「気」の防御能の低下が一因であり、総じてアレルギー性鼻炎の症状は「気虚」として括ることができる。

このように考えると、アレルギー性鼻炎の病態の表象は確かに「水飲」であるが、本態には局所的な「気虚」が大きく関係していると言えるだろう。

そこで、筆者は桂枝加黄耆湯加防風・白朮に升堤作用を付加する意味で柴胡・升麻を加味すればさら

にアレルギー性鼻炎の「気虚」に応じることができるのではないかと考え、エキス剤の補中益気湯を桂枝加黄耆湯に合わせて用いることを始めたのである。代表的な症例を提示する。

## 症 例

### 症例1：10歳、活発な女児

毎年、秋口に鼻水、鼻づまりがひどい。ハウスダストに反応がでた。2、3日前に部屋の掃除をしてから特に悪くなった。鼻が詰まるので眠れない。食欲も落ちた。エキス剤の補中益気湯と黄耆建中湯を1日2回服用させた。4日後、「もう楽になった。食欲も出てきた。」同方継続して2週間で廃薬。再発をみない。

### 症例2：73歳、男性

アレルギー性鼻炎の治療を耳鼻科で受けた（アルゴンレーザー焼却術）その後、化膿して大変だった上、まだ鼻が詰まるし、痒い。濃い鼻が出る。エキス剤で補中益気湯と桂枝加黄耆湯を朝夕に服用させ、併せて昼に荊芥連翹湯を処方した。1週間後、「かなりよくなりました。早く言えばよかった。」同方継続した。2週間で廃薬。再発をみない。

### 症例3：66歳、男性

秋口の花粉症で、毎朝くしゃみと鼻水がひどい。やせ形の大学教師。糖尿病でやや体力が虚している。補中益気湯と桂枝加黄耆湯のエキス剤を眠前に一回だけ服用。3週間後の再来時、「症状は3割程度になって楽になった。西洋薬ではこんなに楽になったことはない。」さらに3週間後には「症状は1割程度」となり、3ヵ月連用して廃薬したが、今シーズン再び症状が出て、同処方を再開している。

奏効した症例は枚挙にいとまがないが、一口にアレルギー性鼻炎と言っても症例によって症状にバリエーションがある。

実証の元気な症例は、補中益気湯と桂枝加黄耆湯あるいは黄耆建中湯の合方でほとんど解決するが、虚証になるとやや力不足のことがある。その際には症状に合わせて小青竜湯や麻黄附子細辛湯、あるいは脾胃虚を補う意味で六君子湯、四君子湯を兼用する。冷えが強ければ当帰芍薬散あたりを兼用するこ

ともある。副鼻腔炎の合併があれば荊芥連翹湯などの併用を考慮する。いずれにせよ、その症例の特徴を捉えて、ベースに補中益気湯と桂枝加黄耆湯の合方を引いた上で、しかるべき方剤を少量兼用することが肝要となる。

## 考 察

補中益気湯と桂枝加黄耆湯の合方は症例によっては即効性があり切れ味がよい。全身的には「気虚」の傾向に乏しく、普段は元気はつらつという実証の患者においてその傾向は顕著である。これは何故であろうか。

補中益気湯や桂枝加黄耆湯（黄耆建中湯はもちろん）は虚証向きの方剤である。これらの合方が実証の患者のアレルギー性鼻炎に比較的即効的に効果を示すことは、極めて興味深い。

推察するに、本処方では全身的に脾胃虚著しい状態を改善して奏効するのではなく、局所の「気虚」を一転回帰して解決に向かわしめるのであろう。免疫反応によって局所的に発生した「気虚」に対して補气的な影響を及ぼすのではないか。それはおそらく、星状神経節ブロックによってなされる交感神経の遮断効果と一脈通じる何らかの効果であって、実証患者においてより顕著に現れる未だ不明の機序によるのであろう。

このように考えると、アレルギー性鼻炎という疾患を通じて、交感神経系と「気」の関係が覗かれるようで、ペインクリニック出身の漢方医として興味は尽きないのである。

## 結 語

- 1、補中益気湯と桂枝加黄耆湯あるいは黄耆建中湯の合方はアレルギー性鼻炎に奏効する。
- 2、その効果はより実証の患者において顕著である。

### 参考文献

- 1) 若杉文吉：鼻アレルギーの星状神経節ブロック治療. 日本医事新報 3130：24-27, 1984.
- 2) 平田道彦ほか：アレルギー性鼻炎患者の証と星状神経節ブロックの効果の相関性. 痛みと漢方 13：13-27, 2003.